



### 写楽って誰？

この質問、幾度されたことか！ 弁護士家業を縮小する理由に「これから写楽を勉強したいから」と話すと10人中8人くらいがこう質問する。

質問にはそう簡単には答えられない。

会員 湯浅 徹志 (23期)

ところで、弁護士家業を事実上しなくなれば、これからどうするかは大問題だが、これまで何事も中途半端だったのだから、今度こそ「精一杯物事に拘ってみたい」と考えた。これからもお付き合い願わねばならない家内に胸のうちの相談した結果、快諾を得たのを力に40年以上関心を持ってきた「写楽探し」に挑戦しようとした次第である。

**写楽探し** が極めて困難なことは十分過ぎる位承知している。結果が出なくても迷惑をかけるのは家内の他にはない。これまでは何かと迷惑をかけないように注意しなければならなかった事件の処理とは大きな違いで決断に迷いはなかった。それから受任事件の整理をし、先日事務所を移転した。

「**写楽探し**」は江戸時代から始まっており、「浮世絵類考」の不完全さを補うことが、多くの写本と補記を生み出したのである。そして写楽という浮世絵版下絵師の素性を突き止めるだけでは終わらない多くの問題がある。役者浮世絵版画に限っても、作画期が10ヶ月と短く作品数が140数点と限られているのに偽造とは言い難い異版といわれるものが多い理由はなぜか、初期の複数作品が多数存在し、後期のかんりの作品が各1点位しか現存しないのはなぜか、これとの関係で明治期に突然主に外国で発見された間判、細判は本物といえるのか、この140数点の役者絵は歌舞伎のどの演目のどの場面の誰のどの役を描いたものか、描く役者を選択した基準は何か、大判大首絵が初期に描かれ、次第に間判、細判と変化したのはどうしてか、など多数ある。この他に、肉筆画、版下絵の問題、等もある。

**写楽が初めて登場** する文献「浮世絵類考」には、写楽の浮世絵版画の批評、評判は記載されているが、絵師の素性は書かれていない。「浮世絵類考」は写楽版画の版元 蔦屋重三郎と極めて近い関係にあった大田南畝がその成立に非常に深く関わっているとされる書物で、その南畝ですら写楽が消えた約5年程後でも写楽の素性を書いていない。明確に登場するのは、斎藤月岑等の「増補浮世絵類考」の写楽の項である。そこには以下の

とおり書かれている。

「写楽 天明寛政年中の人 俗称斎藤十郎兵衛 居江戸八丁堀に住す 阿波候の能役者也 号東洲斎」

斎藤十郎兵衛の存在はほぼ確認されているが、斎藤月岑が何を根拠にこの記載をしたかは判っていない。これが書かれたのは写楽が消えてから約50年後である。あの南畝すら記述していない写楽の素性がこの時期にどうして判ったか根拠が示されていない。

写楽はだれだれの別名である旨の説は現在50を下らない。しかし写楽に関する前記の問題を説明できるものはない。

**これから** この問題に取り組むのだが、正面からではとても無理。そこで、出版当時 蔦屋重三郎のもとで働いていたといわれる十編舎一九の書いた黄表紙で、研究者がほとんど手を着けられないでいるもの書かれている写楽に関することの解説から始めることにしている。同時に、蔦屋重三郎の交友関係を当時の資料から直接探り写楽との出会いを探ること、事業、特に当時取得した書物問屋の株との関係で、この時期に地本問屋としてあえて役者絵版画を刊行したこととの関係を探りたい。素人の私としては画像そのものに関する件はまずこれまでの研究成果を受け入れることから始めたいと考えている。

**そのために** これまで大学院に通い古文書の解説を習い、浮世絵に関する講座を受けてきたが、現状の知識では大変心もとない。更なる勉強が必要と考えている。他の趣味の山歩きをしながら、ある意味で楽しく毎日を過ごしている。



仕事を続けるのも立派なことだが、70歳過ぎて、伊能忠敬のようにはいかないが、残りを自分の時間として使うのも一つの考えとして在って良いのではないだろうか？ 拙い文章では有るが何かの参考にしていただければ望外の幸せである。